都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問いあわせは

都留文科大学附属図書館
住所：402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話：0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

電子紀要トップへ

一高時代の芥川龍之介

Akutagawa Ryunosuke in his Ichiko days

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

はじめに

第一高等学校、略称一高は、一八七四（明治七）年十二月、東京英語学校として神田一橋に開設され、一八七七（明治一〇）年四月、東京大学予備門と改められた。その後一八八六（明治一九）年四月に校名が第一高等中学校となり、さらに一八九四（明治二七）年に第一高等学校と変わり、第二次世界大戦後の学制改革まで日本の高等教育の超エリート校として名を馳せた学校である。本郷向ケ陵に新校舎が建つのは一八八九（明治二二）年のことである。

芥川龍之介はこの学校に、一九一〇（明治四三）年九月入学し、一九一三（大正二）年七月に卒業するまでの三年間在籍した。彼の満十八歳から二十一歳までのことである。青春の感受性豊かな、知性に目覚める時期を、彼は向ケ陵の一高で送るのである。この時代を芥川龍之介の向陵時代と呼ぶことができる。以下に芥川の素顔を考える意味でも大事な向陵時代を、近年出現した新資料をも援用しながら検証する。

無試験検定合格

一九一〇（明治四三）年三月二十六日、芥川龍之介は東京府立第三中学校を卒業した。早くから彼は高等学校進学を目指していた。府立三中の英語の教師であり、学年主任であった広瀬雄（たけし）は、芥川が三年の頃から入試を心配していたので、四年になると週二日ほど自宅によび、英語の講義をしてやったことを回想している（「芥川龍之介の思い出」『三高新聞』第三号、一九四八・一一・一）。当時広瀬雄は生徒指導に熱心な青年教師であった。広瀬の特別指導は、五年生になっても続いた。

芥川は進路を一高英文科に決めていた。入学試験では第一部乙類

とされるコースである。「文学をやる事は、誰も全然反対しませんでした。父母をはじめ伯母も可成文学好きだつたからです。その代り実業家になるとか、工学士になるとか云つたら反つて反対されたかも知れません」（「文学好きの家庭から」『文章倶楽部』一九一八・一）と彼自身回想するように、進路に関しては養家の人々も賛成であったというのだから、恵まれていたのであろう。

同じ年一高第一部乙類に補欠入学した成瀬正一などは、父が実業家であったこともあって、家族の期待は法科なり、経済にあった。そのため成瀬は英文科に入りたかったにもかかわらず、家人の要望を受け、第一部甲類（英法）を第一志望とせざるを得なかったのである。成瀬は辞退者の出た時点で、第二志望とした第一部乙類に入学できたのである。松岡譲の「成瀬正一君の思ひ出」（『文芸春秋』一九三六・七）には、大学進学に際しても成瀬の母峰子は菊池や松岡に、息子が法科に進むよう勧めてほしいと何度も泣きついたとある。その後の生涯で結婚問題はじめ、とかく養家とのかかわりでは苦労した芥川ではあったが、進路に関しては実にスムーズな運びであった。

文科の志望者は、法科や農科に比べると少なかったとはいえ、天下の一高には全国から多くの秀才が殺到した。そのため入学試験は激烈な競争となって、浪人も多数生まれ、社会問題化していた。選抜方法としての入学試験そのものの弊害も指摘されはじめ、この年から中学校の現役で優秀な成績を在学中に収めた者は、高等学校へ無試験検定（推薦）で入学を許可する改革制度が採用されることになる。当時の学制は、中学校の卒業が三月、高等学校の入学試験が七月中旬、入学式が九月十日頃となっていた。

さて、芥川龍之介は府立三中の卒業式を終えると、一高の入学試験をめざして一日「十時間内外」の勉強（山本喜誉司宛、一九一〇・四・一八付）に取り組む。「英文解釈法のつまらなきも左程苦にならぬ様に相成り候」（同上）とも言う。彼は英文解釈・幾何・三角法など主要科目を中心にせっせと準備勉強に励んだ。受験科目は、同じ年に一高第一部乙類を受験した井川（のち恒藤）恭の「二週間の勉強で一高の入学試験を通過した僕の経験」（『中学世界』臨時増刊、一九一〇・九・一六）によると、代数・幾何・英文和訳、和文英訳、国語漢文、物理、それに西洋史・日本史・東洋史などであった。

芥川龍之介は受験勉強に励んでいたものの、できれば無試験検定で一高に入りたかった。卒業して二か月ほどたった六月六日の午前九時半、彼は西川英次郎と山本喜誉司と三人で、一高に入学試験の願書を出しに行った。この日の午後、芥川は府立三中の恩師広瀬雄宛に、事細かに願書提出日のことを報告している。彼はまず次のように書いている。

> 粛白昨夜は失礼致し候今朝西川と山本と三人にて一高へ願書を出しにゆき候校門をくゞりし時一高の時計台は九時半を示し居り候ひしも門衛のわれらに与へたる番号札の既に五十番に達したるに先驚き申候玄関にて下駄をぬがせられ冷なるタヽキの廊下を跣足にて会計課へ受験料を納め候へば会計係の人の小生をよびて「あく川さん」と云ふに再驚申候願書差出人の待合せたる所に至れば小使らしき紺の法衣を着たるが袂を切るやうな機械にて入学志願者の写真の縁（代紙の部分）を無造作に切落し居候其後に洋服の老人と和服の中年の人とが願書と写真とを受

験票にひきかへ居り候しかも受験生の多くが廿歳を越えたりと覚しき大人なるに三たび少なからず驚申候前年度の卒業生と一昨年度の卒業生（？）なる松崎と云ふ人に遭ひ候猶細川が其前年度の卒業生なる人と一緒に参り居り候ひしは意外に感ぜられ候

一高という新たな世界に入ろうとする青年芥川の感激が伝わってくるかのような書簡である。まだ九時半なのに整理番号札が五十番に達していたとか、受験料を納めると「あく川さん」と呼ばれたとか、「受験生の多くが廿歳を越えたりと覚しき大人」であったとか、卒業生の松崎（正彦）に会ったとか、同級生の細川（興治）が前年度の卒業生といたとかの報告にも、新鮮な感想が見られる。報告の便りは、さらに次のように続く。

われらが願書を出せる間に白帽の幾人かが朗々と何やら歌ひながらすぎゆくと異様なる教授服を着たる痩せたる先生のとほるとを見大に羨しく相成候暫待たせられたる後漸くわれらの番になりて願書を出し候ところ二部乙は山本が五十七番西川が五十八番小生の一部乙は僅に四十四番に候ひき猶丁度一緒になれる小生の知人は独法にて八十六番に候由申し居り候一部甲二部甲三部等は既に百番以上に達せし様に見うけられ候理科と文科の不振は之に徴しても明に候

ここには一高の白線帽へのあこがれとガウンを着た教授への熱い目がある。またこの年の一高入試の状況も語られている。自身の志望した一部乙（文科）は志願者が少なく、「不振」とも書いている。が、実際は芥川や他の受験生の予想に反して、この年の一部乙は、かなりきびしい競争となるのであった。そのことは後で述べることにする。この日芥川は受験票と受験の心得を記した書類をもらい、帰宅した後、すぐに広瀬へ手紙を出したのであった。一高受験は一つの人生の区切り（イニシエーション）という感じにとらわれ、彼は恩師に、「唯今帰宅致し候何となく自己の生活が小さき段落をつけられたるやうな気が致し候及第しても落第しても此の段落は長く残ることと存じ候」と末尾に書いた便りを投函する。

一九一〇年の第一高等学校の入学試験には、先にふれたように無試験検定制度が導入された。中学校長の推薦で成績のよい者は、試験を受けなくとも合格させるという試験改革を文部省が打ち出したのであった。激化する入試への対策であった。そこで芥川らは推薦と一般入試の双方をねらったのである。なにしろ無試験検定は、はじめての年のこともあり、予想はつかなかった。そこで彼は試験合格をめざして英語と数学とを中心にした勉強に精を出すのであった。願書受付は六月十五日に締め切られた。第一部乙（英文科）は志願者総数一一六名であった。予想を上回る数であったといえよう。しかも受け入れは、無試験検定入学ワクが数名、試験入学ワクは前年入学の十名が岩元禎のドイツ語の試験に失敗、落第していたので、二十名ほどしかなかったのである。幸い芥川は、六月二十四日に発表された無試験検定合格候補者の名前の中に入っており、胸をなで下ろす。西川英次郎も同様に無試験検定の合格候補者となった。が、いっしょに願書を出しに行った山本喜誉司は不合格であった。親友山本の不合格は、以後しばらく芥川の心の負担となる。

同期生

ここで一九一〇（明治四三）年九月に、一高第一部乙類に入学した芥川の同期生に目をとめておこう。『官報』第八一三七号（明治四十三年八月五日）の「学事」欄に「入学許可第一高等学校ニ於テ来ル九月十一日ヨリ大学予科ニ入学ヲ許可スヘキ者ノ族籍、氏名左ノ如シ×印ハ無試験検定ニ合格シタル者ナリ（文部省）」との記事がある。この記事によると、無試験検定合格者は八名、試験合格者二十一名である。また、『第一高等学校一覧 自明治四十二年 至明治四十三年』（売捌所丸善株式会社、一九〇九・一二・二六）の「第七章生徒姓名（明治四十三年九月調）には、大学予科第一部一年三之組英文科（四十四人）の一覧が載っている。この二つの資料から分かるのは、一九一〇（明治四三）年の一高第一部乙類は、一年三之組、英文科に相当し、無試験検定と試験合格者のほか、留年生が十二名、補欠合格が三名いたことと、その成績順位である。

無試験検定合格の八名とは、成績順に長崎太郎・鎌田寅治・石原登・芥川龍之介・佐野文夫・小来栖国道・根本剛・久米正雄である。このうちその後の消息の知れないのは、二番で合格した鎌田寅二のみで、あとはすべてその後年の歩みは調査済みである。試験入学者二十一名中の主な者は、四番に菊池寛、五番に石田幹之助、七番に井川恭、八番に松岡善譲（のち「譲」一字に改名）、九番に長谷川四郎、十四番に鈴木智一郎、十六番に佐伯正夫、十八番に五十嵐小太郎、二十番に藤岡蔵六である。岩元禎のドイツ語を落とし、留年となった主な名を書き抜くと、坂下利吉・土屋文明・宮本覚純・加藤正義・石戸政則・谷森饒男・山本勇造（有三）らである。さらに補欠入学組には成瀬正一ほか二名がいた。第一部乙類以外の同期生は、第一部甲類に無試験検定合格の矢内原忠雄、試験合格の三谷隆信（隆正の弟）が、第一部丙類に藤森成吉・倉田百三・秦豊吉らがいた。

芥川は八月五日、『官報』で正式合格を確認する。当時『官報』は、ミルクホールなどにも置いてあったのである。「今日官報ニテ発表君ノ夢ノ如ク4番ニ候ヒキ西川ハ一番中原ハズーツト下に候上瀧ハ試験ヲウケタ方ノ二番ニ候ヒキ」とは、同日付の山本喜誉司宛書簡の一節である。補足するなら西川英次郎は第二部乙類（農科）に無試験検定一番、中原安太郎は第一部甲類（英法、政治、経済、商科）に試験合格五十一番、上瀧覓は第三部独（医科）に試験合格二番であったというのである。同期生それぞれとのかかわりは、以下の章で追々述べることにする。

授業と教師

一九一〇（明治四三）年九月十二日、第一高等学校で入学式が行われ、芥川龍之介は晴れて一高の生徒となる。心にひっかかるのは、府立三中時代の親友山本喜誉司といっしょに向ケ陵の校門をくぐれなかったことである。彼は一高の様子をせっせと手紙に書いては、山本に送ることになる。授業がはじまって間もない九月十六日付のものには、「水曜日から授業有之、一週独語九時間英語七時間と云ふひどいめにあひ居候教科書はマカウレイのクライブカーライルのヒーローウオーシップ及ホーソーンの十二夜物語の抜萃に御坐候／存外平凡なもののやうに候へどもそれを極めて正確に且極めて文法的に訳させ候まゝ中々容易な事には無之候殊にクライブを講ずる平井金三氏の如きはevery boyを「どの小供でも」と訳すを不可とし

必ず「小供と云ふ小供は皆」と訳させI have little moneyを「あまり金を持ってない」と訳すを不可とし「金を持つ事少し」と訳させる位に候へば試験の時が思ひやられ候」との文面を見ることができる。

授業は語学が重視されたのである。語学詰めである。その他は国語・漢文・東洋史・西洋史・倫理学・法学通論などである。『第一高等学校一覧（自明治四十二年至明治四十三年）』の第八章に、当時の職員名簿が載っている。それによると学校長は新渡戸稲造、教頭菊池壽人、第一文科主任斎藤阿具と続く。以下主だった教師を芥川とのかかわりでピックアップするなら、英語村田祐治・同畔柳都太郎（くろやなぎくにたろう）・同石川林太郎、独語岩元禎、同菅虎雄、同福間博、倫理・心理・論理・独語速水滉、仏語杉田義雄、国語・作文添削杉敏介、同今井彦三郎、漢文・作文添削塩谷時敏、東洋歴史箭内亘（やないわたる）、外国教師英語ジョン・ニコルソン・シーモア、同仏語・羅甸（ラテン）語・西洋歴史カミル・ジロー、同独語・羅甸語エルンスト・エミール・ユンケルなどである。

右のうち芥川龍之介と特にかかわりが深かったと思われる教師に、光を当ててみよう。まず、校長の新渡戸稲造は、岩手県出身。一八六二（文久二）年九月一日の生まれなので、芥川が一高入学時は、満四十八歳の働き盛りであった。彼は札幌農学校出身の農学者であり、教育家で一家を成した。アメリカ・ドイツに学び、農業経営学・農業統計学などを学ぶ。帰国後、札幌農学校、京都帝国大学、東京帝国大学などの教授を経て、一高校長となる。「太平洋の橋とならん」が信条で、英文で書かれた著書『武士道』は、世界各国語に翻訳された。芥川は一高入学後、新渡戸の倫理（修身講話）の講義を聴くことになる。毎週一回一年生全員を第一大教場に集めて話をしたのである。必修の授業であったらしく、芥川の「明日の道徳」（『教育研究』一九二四・一〇）には、「実は時々休んで、人に返事をして貰った事もあります。併し先生の講義は非常に評判が宜いので、兎に角聴く事は聴きました」とある。また、そこではある日の講義で、新渡戸の倫理観に憤慨したと言い、「其の憤慨は時間にすると、彼是三四年も連続しましたが、今日では新渡戸先生の言葉に、よし多くでないにしても、多少の真理を認めて居ります」とある。芥川初期の作品「手巾（ハンケチ）」（『中央公論』一九一六・一〇）の主人公長谷川謹造先生は、新渡戸稲造をモデルとしたものである。

英語の畔柳都太郎は、山形県生まれの英文学者・評論家として一定の仕事も残した人である。一八七一（明治四）年五月二十七日の生まれなので、芥川らが一高に入学した一九一〇（明治四三）年九月の時点では、満三十九歳、脂の乗った教師生活を送っていた。芥舟の雅号をもち、東京帝大文科大学英文科時代は、雑誌『帝国大学』の編集委員として活躍した。大学卒業後、一時、『太陽』の文芸欄を担当したこともある。一高の教師となってからは、『明星』『人文』などの雑誌にもかかわった。英語辞典の編集上の業績もある。一高では授業のほか、弁論部の部長をつとめ、後述する「蘆花事件」の際には、文部省から譴責処分を受けることになる。

芥川龍之介は、畔柳都太郎のよき学生だったらしい。そのせいか畔柳の主催する会のアイルランド文学会などにも誘われ、出席していた。芥川が一九一六（大正五）年七月に大学を卒業したものの、仕事なく、さりとて作家としてもいまだ自立できなかった時に、横須賀の海軍機関学校の英語教師の口を斡旋するのも、ほかならぬ畔柳都太郎であった。

ドイツ語にはユニークな教師が多かったが、その第一は岩元禎である。岩元は畔柳の二歳年上の一八六九（明治二）年五月三日生まれ。鹿児島の士族の出である。東京帝国大学文科大学哲学科を卒業、在学中はケーベルにも学んだ。東京高等師範学校から一高に移り、ドイツ語のほか哲学も担当した。漱石の『三四郎』の「偉大なる暗闇」、広田先生のモデルとのひそかな噂が学生の間にながれはじめていた。当時、一高では教授たちの多くは、黒いガウンを着て講義をしたものだが、この名物教授はガウンを着けず、甲高（かんだか）い鹿児島なまりの声で講義をしたという。高橋英夫の『偉大なる暗闇―師岩元禎と弟子たち』（新潮社、一九八四・四）は、この「情容赦もなく注意点（赤点）をつけ、落第させる先生」を論じた労作である。高橋英夫はこの書で、「岩元禎を通じて明治の日本人の精神史を見とどけたかった」のだという。

一九一〇年入学の芥川のクラス第一部一年三之組英文科には、岩元担当ドイツ語落第生が十名ほど在籍していた。その中には前述のように、土屋文明や山本有三といった後年文学で名を成した人もいた。芥川龍之介も授業で学生を厳しく叱りつけ、成績が悪いと、如何なる理由があろうと落第させる岩元禎の授業を受けることになる。が、学生に罵声を浴びせ、厳格な採点をする岩元には、どこかに人を引きつけるところがあった。それゆえ芥川も岩元の授業や過酷な評価におびえた日々を過ごしたものの、一高卒業直後、一九一三（大正二）年九月十七日付の山本喜誉司宛ての便りでは、「三年間の追憶がなつかしくない事もなく候もう一度岩本（ママ）さんに叱られてみたい様な気にもなり候」と書いているほどだ。

同じドイツ語の福間博は、学生に人気のある教師であった。福間は一八七五（明治八）年五月二十三日、島根県の生まれ。ドイツ人宣教師に導かれて受洗したことが機縁となって、独学でドイツ語を修得するするといった努力の人であった。森　外を師と仰ぎ、その小倉赴任とともに後を追って交わりを結んだ。山口高校教授を経て、一九〇三（明治三六）年から一高講師となり、三年後教授に昇格した。小柄で金縁の近眼鏡をかけ、長い口ひげをはやした福間は、勉強家で授業も熱心に行っていた。彼は　外の「二人の友」（『アルス』一九一五・六）に、F君の名で登場する人である。芥川は後年　外の向こうを張って「二人の友」（『楓欅樹（校友会雑誌第三百号記念）』一九二六・二・一）を書き、人気教授福間博のプロフィールを書き残した。　外の描くF君は、学問一筋の禁欲家、語り手の観察によれば、いまだ童貞で、一風変わった「無遠慮なEgoist」である。それに対して芥川の描く福間先生は、やさしくユーモアに満ちている。さわりの部分を引用しよう。

> 僕等は皆福間先生に或親しみを抱いてゐた。それは先生も青年のやうに諧謔を好んでゐられたからである。先生は一学期の或時間に久米正雄にかう言はれた。
>
> 「君にはこの言葉の意味がクメとれないんですか？」
>
> 久米も亦忽ち（またたちま）洒落を以て酬（むく）いた。
>
> 「えゝ、ちよつとわかりません。どう言ふ意味がフクマつているか――」（中略）
>
> 福間先生にからかはれたのは必しも久米に限つたことではない。先生はむづかしい顔をされながら、井川にもやはりかう言はれた。

「そんな言葉がわからなくてはイカワ。」

福間博は芥川が二年生の一九一二（明治四五）年二月三日、三十代の半ばで咽頭の癌で死亡する。芥川はその頃親しみを増した井川恭と、福間の亡くなる少し前の同年一月二十五日に、入院先の永楽病院に見舞いに行っている。井川は見舞いと葬儀の様子を「井川日記」（『向陵記Ⅳ』一九一二・二・五、新版『芥川龍之介全集』月報19に収録）に書き残した。見舞いに行ってのことと、その感想を記したところは、以下のようだ。

高いまくらをして友ぜんのふとんに白いえりをあてた中から、土のやうな色をした、ごむのやうに血のけのなくなつたかほがひよこり出てゐた。「先生、いかがでいらつしやいますか」といふと、力なくうなづいて「あ、けふは少しいゝ方です」といはれる。芥君が「いつごろからご入院ですか」と奥さんにきく。先生は瞪目してをられる。ふたりは、しばらくそのまゝ立つた。そして「お大切に」と奥さまにあいさつすると、先生がひくいかすれたこゑで「ア、遠いところをありがとう」といはれた。外套を小わきにふたりは出た。しづかな病室におとろへはてた人を見まつてをられる奥さんはかあいそうだと思つた。

「あんなだらうとは思はなかつた。気の毒だなア」

「ぜうだんくらゐはいへるんだらうと思つてゐたんだが」

また、芥川の「二人の友」には、「福間先生の死なれたのは僕等の二年生になつた時か、それとも三年生になつた時か、生憎はつきりと覚えてゐない。が、その一週間か前に今の恒藤恭――当時の井川恭と一しよにお見舞に行つたことは覚えてゐる。先生はベッドに仰臥されたまま、たつた一言　大分好い　と言はれた。しかし実際は　大分好い　よりも寧ろ大分悪かつたのであらう。現に先生の奥さんなどは愁はしい顔をしてゐられたものである」とある。とにかく衰え果てて冗談一つ言わない福間に接し、二人は粛然とする。『第一高等学校校友会雑誌』第二一三号（一九一二・二・二八）に、「故福間博教授を悼む」の追悼記事が載っている。

いま一人のドイツ語の先生菅虎雄は、漱石の学友であり、第五高等学校教授時代に漱石を五高に招いたことでも知られる。一八六四（元治元）年十月十八日の生まれなので、芥川らの在学中は四十代半ばということになる。ドイツ語学者としてのみならず、能書家としても知られた。芥川は一高卒業の年の一九一三（大正二）年十一月十六日、友人藤岡蔵六と鎌倉の菅の家を訪問し、その夜は菅宅に泊まっている。芥川はその様子を井川恭宛書簡に記すことになる。芥川は菅の書への造詣の深さと鑑識眼の高さに驚き、「先生にとつて独乙語の如きは閑余の末技に過ぎないのであらう」との感想をもらす。芥川がのちに第一創作集『羅生門』を出すに際して、題字と背文字などを書いてもらったり、田端の家の書斎の扁額「我鬼窟」の三文字に筆を揮ってもらうのは、彼の菅への高い評価によるのである。一九一六（大正五）年十二月一日付で、芥川は横須賀の海軍機関学校の英語の教師となるが、その際には菅に「賄つきのよい間貸し」（菅虎雄宛、一九一六・一一・一六付）を見つけてくれるよう依頼している。また鎌倉に移転した後は、しばしば菅宅を訪問するようになる。「時々菅さんの所へ行くので少々法帖趣味を解してき

た」（松岡譲宛、一九一六・一二・一七付）との便りもある。

国語・作文添削の杉敏介は、後の一高校長である。芥川や井川恭の作文を見て添削をした。「高等学校作文用紙」に墨書させ、丁寧な添削をしたことで知られる。課題作文を課すことが多かった。例えば、「富士山」とか「寒夜」「梅花」「菊」などの題であり、芥川に「富士山」「寒夜」「梅花」「菊」、井川にも「富士山」「寒夜」「梅花」「菊」の文章が残っている。

外国教師では、ドイツ語のエルンスト・エミール・ユンケルが第一にあげられる。彼はドイツのサクソニー地方に生まれ、一八八六（明治一九）年来日し、金沢の四高のドイツ語教師、神戸ジャパン・クロニクル紙の支配人を経て、一高のドイツ語教師になった。彼は禿頭で音楽を好み、学生に人気があった。芥川が一九一三年八月から九月にかけて井川恭や山本喜誉司に送った便りに添えた短歌に、「禿頭のユンケルこそはおかしけれわが歌を見てＷＡＳ？とひける」が見出せる。同じ外国教師の英語担当ジョン・ニコルソン・シーモアは、同じく禿頭であり、授業には熱心であった。芥川は井川恭宛書簡（一九一二・八・三〇）で、「ａｂｃと云ふとゆんけるの細い褐色の頭の毛を思ひ出す　ゆんけるを思ひ出すとしいもあ先生の桃色の禿も思出される」と回想している。芥川にシーモアを題材とした「首まげてもの云ふ時はシイモアもあかき鸚鵡のこゝちこそすれ」の歌がある。

自治寮

一高は原則として全寮制をとっていた。が、芥川は最初の一年間、理由は不明ながら入寮していない。『第一高等学校一覧（自明治四十一年至明治四十三年）』の第四章「規則」の第十二款「寄宿及ビ通学」第三条には、「本校生徒ハ在学中寄宿寮ニ入ルヘキモノトス但シ特殊ノ事情アル者ニ限リ審査ノ上通学ヲ許可スルコトアルヘシ」とある。芥川はこの「特殊ノ事情」によって通学を許されたことになるが、その内実は定かでない。とにかく何らかの理由、――家が本所小泉町から新宿に移転し、年老いた両親と伯母を抱え、いまだ落ち着きを得ないとかがあったに違いない。一高の全寮制度は下級生には非常に厳しく適用されたので、二年に進級に際しては、芥川も入寮せざるを得なかった。芥川は中寮三番に入る。三年生当初の一九一二（大正元）年九月の入れ替えでは北寮四番に入っている。

一高の自治寮は、一八九〇（明治二三）年三月に発足し、一九〇〇（明治三三）年九月に南・北・中の新寮が完成して、皆寄宿制度が確立したのであった。芥川が入寮した頃の一高では寄宿寮として、南寮・北寮・中寮・朶寮・和寮・東寮・西寮・明寮と八つの寮があった。寮生には自治が許され、それゆえの自治寮なのである。酒やたばこも自由であった。飲食店や劇場への出入りも、むろん自由であった。ストームと称して寮内で酒を飲み、放歌高吟するのが、籠城主義という寮の伝統だ、理想だという考えは、この頃には疑われ出してはいたが、相変わらず主流であったことには変わらない。賄征伐などという我儘者の行為さえ、ゆるされていたのである。

当時の一高の寮は、一室十二人であった。それまで一人っ子同然の生活を送り、個室を与えられて育った芥川は、狭い部屋での学友との共同生活には馴染めないものがあった。彼は大勢でのストームや、特に賄征伐などという野蛮な行為を嫌った。それがいわゆる一高式ボヘミヤニズムだと言われてもピンとこなかった。九月入寮し

た芥川は、ストームとコンパの季節を迎え、一人静かに過ごす時間を奪われるのに不満を抱いた。その点では、彼は一級上の豊島与志雄に共通するところがあったのである。豊島与志雄は一八九〇（明治二三）年十一月二十七日、福岡県朝倉郡福田村の生まれ。福岡の県立中学修猷館を経ての入学であった。彼も一人っ子として育ち、一人静かに瞑想をすることを好んだ寮生活不適応組であった。ストームとコンパによって醸し出される独特の雰囲気を、当時の一高生は「向陵精神」と称した。たとえば豊島と修猷館から同時に入学した西愛人（第一部丙）は、母校の『同窓会雑誌』第二十四号で寮の生活にふれ、「一種独特の暖かい空気は常に此天地に充満して居る。温い空気といふ或は此を向陵精神といつてもいいだらう」と書きつけている。が、芥川や豊島には、このような意味での向陵精神とは縁がなかった。むしろ彼らには先輩の魚住影雄や安倍能成が、『校友会雑誌』で展開していた皆寄宿制度批判に同感するところがあったのである。豊島与志雄などは後年「一高怪談」（『橄欖樹 校友会雑誌第三百号紀念』一九二六・二・一）という随筆で、多人数の同居制は「個性の自由な成長を何等かの意味で拘束しはしないか」と言い、寮生活への疑義を呈しているほどだ。

芥川のよき理解者となる藤岡蔵六もまた、寮生活とくに賄征伐には、厳しい目を向けていた一人であった。彼は後年『父と子』（私家本、一九八一・九、日付なし）に、一高自治寮の悪癖として賄征伐を槍玉にあげ、くわしくその弊害を述べている。以下のようだ。

私は豫（かね）て賄征伐と言う言葉を耳にして、大方それは炊事人が悪事を働いた場合之を懲罰する制度を意味するのだろうと解釈していた。所が事実は全然相違していた。賄方は何も悪い事はしない、ただ混雑のため給仕が遅れただけである。それを憤慨して茶碗を投げ付けるのは、全く駄々児のする仕業である。私憤を晴らすために公器を破壊することは果して正当であろうか？抑々給仕の速度が鈍いからとて腹を立てると言うこと夫自体が、果して教養ある人の執るべき態度だろうか？教養ある人なら温順しく待って居るべきではないか、それとも一高生は粗暴を誇りとするのか？、私は食堂に於ける此の奇怪な行為に対し反感と憤怒とを感じた。

或日隣室の一生徒は、給仕が遅いと言って憤慨して席を立った。彼は同室生がまだ食事して居るにも拘らず両手で食卓を顛覆した。卓上に在った飯と菜と茶碗とは、大きな音を立てて四辺に散乱した。彼は駭き騒ぐ賄方を尻目に、意気揚々として出て行った。私は彼の餓鬼と夜叉とを一緒にしたような顔を見た時、義憤に燃えて、其顔面に大きな鞭を加えてやり度いような気がした。私は一高の自治寮から斯かる悪風が姿を没するまでは、之を無条件に讃美することは出来ない。寮雨やストームはまだ可い。賄征伐に至っては実に言語同断である。

芥川龍之介は、ストームとコンパ、賄征代に代表される「向陵精神」にはかかわりがなかった。否定的であったと言うべきか。彼には寮生活は決して快適なものではなかった。個性を没却してまで他者と協調するのは、苦痛であった。そこに彼の素顔があった。だが、寮生活を通し、彼は生涯交わりを結んだ親友、――井川恭をはじめ何人かのよき友とめぐり合うことになるのである。

友情

寮生活は一室十二名、何かと制約はあったものの、友情を育てる土壌であった。通学生だった入学当初の芥川龍之介は、まず佐野文夫と親しくなる。後年初期の日本共産党委員長となる男だ。通学生時代の芥川は、一高の同級生に友人がなかなかできず、府立三中時代の友人山本喜誉司に長い便りを出しては、一高の様子を知らせたりして孤独を慰めていた。また一高の図書館や近くの上野の図書館に「鑵詰まる」ことで、もっぱら書物の世界に没入していた。それでも佐野文夫とは比較的交わりがあったのである。佐野は容貌に恵まれた秀才だったから、クラスの中でも目立っていた。入学当初は、よそ目にも芥川と佐野の接近ぶりは明らかであった。菊池寛は「半自叙伝」（『文芸春秋』一九二八・五～二九・一二）に、「一年生時代に、芥川は佐野文夫と親しかつた。二人とも秀才でどこかに圭角を蔵してゐた」と書いているほどだ。が、二人の仲は長くは続かず、芥川は入寮するや、井川恭という無二の友を得ることになる。

井川恭、のちの法哲学者恒藤恭は、島根県松江市の出身である。一八八八（明治二一）年十二月三日の生まれなので、芥川より三年三か月ほど年長である。一九〇六（明治三九）年三月、島根県立第一中学校を卒業したが、悪性の消化不良のため進学を断念、療養につとめ、快癒した四年後の一九一〇（明治四三）年春上京し、都新聞社記者見習い中に一高入試を思い立ち、試験を受けて第一部乙類に合格したという経歴の持ち主であった。療養生活中には、『ハガキ文学』『萬朝報』『松陽新報』などに短歌や詩や小説や随筆を発表し、『都新聞』の懸賞小説に応募し、自然主義文学の影響を受けた「海の花」が一等入選し、三五〇円という大金を獲得するなど、その文学歴には輝かしいものがあった。

芥川と井川は入学直後は、ほとんど交流がない。近年出現した井川恭の一高時代の日記「向陵記」に、芥川の名が最初に登場するのは、入学した年の十一月二十九日である。「向陵記」には、菊池寛の名は入学第五日に早くも見られ、十月十一日から十三日にかけて、甲府・酒折方面で行われた「発火演習」における甲府の宿での記事には、菊池のほか八木實道・根本剛・久米正雄・小栗栖国道らの名が出て来ているのに、芥川の名が見られないのは、この時期における疎遠ぶりを示すものでもある。恒藤恭の「青年芥川の面影」（『近代文学鑑賞講座11芥川龍之介』角川書店、一九五八・六・五）には、「入学直後の第一学期のあいだは特に芥川と親しく接触するということもなかったけれど、つぎの学期となって（どのようなきっかけからであったかは記憶していないが）私たちは急速に親しい間柄となった」とある。

二人がより接近し、互いに相手にひかれるものを感じ、深く交流するようになるのは、芥川の入寮後のことである。二年生になって寮生活を送るようになった芥川は、前述のように中寮三番に所属した。井川恭と一緒の部屋であった。先にもふれたように、一室十二名の共同生活は、それまで養家で一人っ子として大切にされ、個室を与えられて生活してきた芥川には、あまりなじまなかったが、井川恭はそういう芥川に寮生活の先輩として、何かと助言を与え、相談にのるのであった。他の仲間は成瀬正一・藤岡蔵六・八木實道・鈴木智一郎・石田幹之助・黒田照清・五十嵐小太郎らで、しばらくして長崎太郎も加わった。

当時の井川恭を成瀬正一は、「級の首席で温厚な人。親切である。

井川君の様な人は時々菊池の様な奴に欺かれる。級の総代として最もよい人」（『成瀬日記』一九一二・五・二七）と評している。当時の井川恭は、鈴かけ次郎のペンネームを使って『中学世界』や『教育学術界』という雑誌に作品を送っては学費を稼ぐセミプロ作家であった。芥川との交流の深まる一九一二（明治四五、大正元）年から翌一九一三（大正二）年にかけて、右の二つの雑誌に鈴かけ次郎（鈴懸次郎、篠懸次郎）、もしくは井川天籟（恭）の名で発表した作品のリストアップを示すと、次のようである。

中学世界

「中学入学桃色のローマンス」第15巻第5―6号　一九一二年五―六月
「海よ青き海よ」第15巻7―8号　一九一二年七―八月
「悪戯四人書生」第15巻11、13号　一九一二年九―十月
「さらば中学時代よ」第16巻6―7号　一九一三年五―六月
「夏のファンタジア」第16巻10―11号　一九一三年八―九月
「少年秋戦行」第16巻14―16号　一九一三年十一―十二月

教育学術界

「ニンフの歌」第24巻第6号　一九一二年二月
「跳る浪」第25巻第1―2号　一九一二年四―五月
「くるみ拾ひ」（トマス・ハーディ）第25巻第4号　一九一二年七月
「二先生」第25巻第6号　一九一二年九月
「空白の一点」第26巻第4号　一九一二年十二月
「オイッケン教授の幸福観」第26巻第7号　一九一三年三月
「レアタ・アキリア」第27巻第1号　一九一三年四月
（アナトール・フランス）
「バルタザアル」第27巻第5号　一九一三年八月
（アナトール・フランス）
「上京」第27巻第6号、第28巻第1―3号　一九一三年九―十二月

井川は、このほかに故郷の新聞『松陽新報』に、いくつものも小説や随筆を寄稿していた。が、彼は芥川や長崎太郎などとの交流において、この事実を漏らしていない。『松陽新報』の随筆は、時に見せることはあっても、小説を書いていることは、秘めていたのである。父はすでに亡く、彼は経済的に自活が求められていた。投稿という行為は、彼に小遣い銭を稼がせることでもあったのである。

が、投稿は時にトラブルを生む。当時は一高生が学外の新聞や雑誌に、たとえ少年ものであろうと作品を載せるのは、慎重でなければならなかった。舎監に注意されるであろうし、仲間の眼もうるさかった。事実、井川恭は一年生の時『萬朝報』の懸賞小説に応募し、「南寮日記」という作品が当選した際に苦い経験をしていた。この時は「丘のひと」というペンネームを用いたものの、新聞に「第八〇七回懸賞小説当選本郷区井川恭」と本名が別に出てしまったため、寮生に気づかれ、一騒動が起こりそうになったのである。下手をすると、それこそ鉄拳制裁である。二日連載の「南寮日記」は、一九一一（明治四四）年五月五日に（上）が出る。原稿用紙にして六枚ほどの短いものである。一高の寮を舞台とし、そこでの生活を巧みな文章でつづっている。ところが、中に「籠城主義の寮の生活」とか、「南寮五番はシャンばかり」とかのことばが出てくるせいか問

題とされたのである。

最近公開された井川恭と同室生だった森田浩一の「浩一日記」（『森田浩一とその時代』収録、福生市郷土資料室、二〇〇一・一・二五）の一九一一（明治四四）年五月六日の記録に、「昨日から出て居る、井川君の新寮日記、南寮五番の人々などが写してある。中々面白い。すると昼頃南五の出目君が井川君を呼んで行つた。之は一騒動持ち上り相な様子なので、三溝（注、又三）、矢内原（注、忠雄）等が後へついていつた。間も無く帰つて来た。聞けば南五の小島と云ふ人が曰ふには、個人的の事は何でもないがあまり寮の事を書いてはいけない之から注意する様にと云つた相だ」とある。

投稿にまつわるこういうトラブルは、つきものである。井川恭はそれをさける意味で、鈴かけ次郎の名を用いた。そしてそのことを人に語らなかったのである。親友芥川龍之介にさえ語っていない。中寮三番の仲間で井川がひそかに小説を書いて、それで学費を稼いでいることを知っている者はいなかった。もっとも彼にしてみれば、少年小説はあくまで生活の手段としてのものであり、自慢するようなものではなかったのである。むしろ恥ずかしいものだったかもしれない。『教育学術界』に載せた翻訳は別にして、他は多くは通俗性の濃い読み物であった。それゆえ彼は書くという行為を、表沙汰にしなかったのである。

「恒藤恭は一高時代の親友なり」にはじまる芥川の「気鋭の人新進の人恒藤恭」（『改造』一九二二・一〇）には、一高時代の井川恭の生活が、的確に描かれている。芥川は同じ自治寮に寝起きした友人の生活にふれ、「恒藤は朝六時頃起き、午の休みには昼寝をし、夜は十一時の消燈前に、ちゃんと歯を磨いた後、床にはいるを常としたり。その生活の規則的なる事、エマヌエル・カントの再来か時計の振子かと思ふ程なりき」と書く。井川恭の寮生活の様子がよく伝わってくる。規則正しい生活、それは井川恭の生活哲学であった。三年間の療養生活は、彼に健康の大切さを教えた。健康があってはじめて学問も研究生活もできるのだとの考えは、以後の彼の長い研究生活の信条となっていく。井川恭はのち京都大学で法律を専攻し、法哲学の権威となり、京大教授や大阪市立大学学長をつとめた。

一緒に学寮に寝起きして、芥川は井川の生活態度にいたく驚く。右の文章は続けて「恒藤は又秀才なりき。格別勉強するとも見えざれども、成績は常に首席なる上、仏蘭西語だの羅甸語だの、いろいろのものを修業しゐたり。それから休日には植物園などへ、水彩画の写生に出かけしものなり」とある。それまで勉強一筋の生活に追いやられていた芥川は、ここにゆとりを持って一高生活を楽しむ友を見出し、不思議に思う。このほか井川恭は、毎月のように小説や随筆や翻訳を雑誌に鈴かけ次郎の名で書いていたのである。芥川はさらに右の文章で、「一高にゐた時分は、飯を食ふにも、散歩をするにも、のべつ幕なしに議論をしたり。しかも議論の問題となるものは純粋思惟とか、西田幾多郎とか、自由意志とか、ベルグソンとか、むづかしい事ばかりに限りしを記憶す」と。

井川恭のほかに、一高時代に芥川は何人かの友人と親しくなる。赤城山への卒業旅行を共にしたのは、井川恭と藤岡蔵六と長崎太郎である。この三人が芥川をめぐる交友関係図の中心に所属する。そこで駆け足で他の二人、――藤岡蔵六と長崎太郎にふれておきたい。

藤岡蔵六は愛媛県宇和郡岩淵村（現、津島町）の出身。愛媛県立宇和島中学校を経ての入学であった。一八九一（明治二四）年二月

十四日の生まれなので、芥川より一歳年上である。中学時代に体をこわし、一年休養した後の入学であった。「成瀬日記」（一九一二・五・二七）には、「伊予の人だ。やはりまじめな人だ。中々の勉強家だ。静座法に熱心な人だ。哲学をやる由だ」と出てくる。彼は読書を好み、観劇を好み、常に何かを求めずにはいられない理想主義者であった。岡田虎次郎の静座法に打ち込み、近角常観（ちかずみじょうかん）の求道学舎に仏教説話を聴きに行くかと思えば、他方、当時海老名弾正が牧師をしていた本郷教会（本郷弓町教会）の主日礼拝に出席したりしていた。

入学早々、芥川は藤岡蔵六とことばを交わすようになる。先にも述べたように、当初自宅から通学していた芥川は友人ができず、孤独をかこっていた。人一倍恥ずかしがり屋であった都会人の彼は、新しい環境になじめなくて、「さびしい」ということばを、府立三中時代の親友山本喜誉司宛書簡に繰り返し書きつけていたほどだ。藤岡の『父と子』には、一高入学当初のことが回想され、芥川に遊びに来るように話しかけられ、新宿の芥川家に行き、搾り立ての牛乳をごちそうになった話が出てくる。『芥川龍之介全集』の書簡集には、藤岡宛のものが十四通収録されていて、その深い交わりを示している。

後年芥川は「学校友だち」（『中央公論』一九二五・二）というエッセイに藤岡蔵六を取り上げ、寸評を加えている。中に「僕の友だちも多けれども、藤岡位損をした男はまづ外にあらざるべし。藤岡の常に損をするは藤岡の悪き訳にあらず。只藤岡の理想主義たる為なり」との印象深い記事がある。わたしはこの記事の裏をとりたいと考えていた時、藤岡の長男眞佐夫から出隆の「藤岡事件とその周辺」（『出隆著作集』第七巻、『出隆自伝』勁草書房、一九六三・一一・二〇）の存在を教えられた。それによると、藤岡は一九一六（大正五）年に東大の哲学科哲学専修を首席で卒業、大学院に籍を置き、哲学研究室の副手となる。彼の最初の学問上の仕事は、ヘルマン・コーエンの『純粋認識の論理学』（岩波書店・一九二一・九・一〇）の訳書である。一九二一（大正一〇）年には、同級生に先立ち在外研究員としてドイツに留学、その直前に東北帝国大学教授にも内定していた。が、そうした先輩を出し抜いた行為が災いしてか、帰国後、東北帝大に就任できないという事情が生じる。芥川言うところの理想主義者、裏を読むなら世間知らずが災いしたのである。出隆の「藤岡事件とその周辺」は、和辻哲郎らによって疎外されていく藤岡のことが、かなりくわしく述べられている。芥川の「学校友だち」の藤岡の項は、こうした裏事情を押さえた上で、藤岡に同情を示したものである。

芥川は、旧友弁護の意味も込めて言う。「世間は藤岡を目して辣腕家（らつわんか）と傲（な）す。滑稽を通り越して気の毒なり。天下の人は何と言ふとも、藤岡は断じて辣腕家にあらず。欺（あざむ）かし易く、欺かされ易き正直一図の学者なり」と。藤岡は失意の内に、そのころ新設された旧制甲南高校教授となり、神戸に赴任する。が、数年後、病気がちとなり、勤務も辞め、生涯不遇を余儀なくされた。

一高時代の藤岡は、常にものごとを疑ってかかる懐疑的な面をもつ青年であった。その意味では、彼は芥川とは同類項の人なのである。彼は次に取り上げる長崎太郎のような、純粋な信仰を持ち得なかった。彼は理性と信仰との間で、悩み苦しんでいた。芥川はそういう藤岡を好もしく思い、井川に次ぐ交わりを結ぶのであった。芥

川が失恋の際に、その苦しい胸中をうち明けたのは、井川恭と山本喜誉司と藤岡蔵六の三人であったことも想起される。なお、わたしは「芥川龍之介と藤岡蔵六」という別稿を準備している。くわしくはそちらに譲りたい。

次に長崎太郎に移りたい。長崎太郎は高知県安芸郡安芸町（現、安芸市）の生まれ。高知県立安芸中学校を経ての一高入学であった。無試験検定トップ合格であったことは、先に述べたところだ。一八九二（明治二五）年六月十九日の生まれである。中学校時代から弟次郎（後年キリスト教出版で知られる新教出版社社長となる）と家の近くの日本基督教会安芸教会の日曜学校に通い、植村正久門下の百島操牧師に信仰と文学の種をまかれる。百島は理想主義者のトルストイアンであり、植村の起こした『福音新報』に百島冷泉のペンネームで、児童向けの読み物を盛んに発表していた。代表作は「蕎麦（そば）」「富者と天国」などであり、清新な作風は一部で注目されていた。長崎太郎は百島の影響で、一高文科（英文科）を志望したのである。

上京後長崎太郎は、百島の勧めもあって、百島の出身教会である日本基督教会市ヶ谷教会に出席することになる。芥川が一高時代に出席した教会の一つとして、有力視される教会である。長崎は一高一年生の一九一〇（明治四三）年十二月のクリスマス礼拝で、秋月致牧師から洗礼を受ける。長崎太郎十八歳の時である。以後彼は熱心なクリスチャンとして一高時代を過ごすのであった。彼の信仰は、ストイックなものであった。彼が当時大阪東教会に転出した百島操牧師に出した便りの下書きが残っている。そこには自身の信仰に関して、「基督に対する尊敬愛着の念の次第に燃ゆる事を覚え申し候」とか、「たゞひたすらに基督を知りこれに没入せん事を努め申しおり候」とかあって、熱心に信仰の道を歩む若き長崎太郎を偲ぶことができる。

長崎は二年生のはじめには、菊池寛などと南寮八番で生活を共にしていた。その後、寮の編成替えの時、芥川や井川恭のいる中寮三番に移り、そこで芥川を知るのであった。その交わりが深くなるのは、中寮三番から北寮四番時代のことである。近年出現した長崎太郎の一高時代の日記（「長崎日記」）には、芥川との交流がくわしく書き記されている。例えば「芥川君からオットーの文法と晶子の青海波とを送つてくれた日」（一九一二・八・九）とか、「芥川君と散歩した。同君としては最もおおつぴらに色々の話をせられた。兎に角に自分は同君の話を聞いて芥川君に対してより多くのよい考へを持つ様になる事だらう。うれしい散歩であつた」（一九一二・九・二五）とかいった具合である。

これも新資料である「成瀬日記」の同じ年の五月二十七日の記述には、芥川を評して、「中々の秀才、府立三中の出身で無試験で入つた人。席順は井川君の次だ。シンミリ話したら中々面白さうだけど中々黙つてゐて話さない」とあるから、長崎とのかかわりは本の貸し借りから、共に散歩までしているのだから、相当な仲であったことになる。一方、芥川は自分より若い長崎の純な心を愛した。芥川の全集未収録の短歌「晩春のノスタルジアに潤へる友の眼のやはらかさかな」は、赤城・伊香保方面への芥川・井川・藤岡・長崎の四人による卒業旅行の際に伊香保の宿で詠まれたものである。長崎は後年京都市立美術大学（現、京都市立芸術大学）学長となり、すぐれた人材を育てることになる。芥川の一高時代の友人には、後年の『新思潮』同人仲間の菊池寛・久米正雄・松岡譲・成瀬正一らが

おり、他にも山本有三や土屋文明など前年入学の留年組の人々もいるが、ここでは、これまであまり言及されていない主要な友人にかぎって、新資料を紹介するかたちで述べるにとどめた。

キリスト教

ところで、一九一〇（明治四三）年、一高入学組には、キリスト教とのかかわりがきわめて強いことに気づくのである。芥川本人もむろんのこと、彼の近くにいた井川恭・藤岡蔵六・長崎太郎、それに佐野文夫や成瀬正一や松岡譲、そして学科は違ったものの、第一部甲類に入学した矢内原忠雄や三谷隆信（法哲学者三谷隆正の弟）などが、たちどころに浮かんで来る。

一高には基督教青年会という集まりがあり、長崎太郎や矢内原忠雄や三谷隆信らが所属し、暗い教室で集会を開いていた。純な信仰者であった長崎は、井川恭や芥川に教会への出席を熱心に説いたという。長崎は自らの考えを他者にも語り、教会行きを勧めたのである。宮坂覺の「芥川龍之介の作家前史試論―青年期におけるキリスト教―」（『上智国文』第10号、一九七〇・二）によると、芥川も長崎の勧めで教会に出席したという。その教会は特定できないものの、前述のように長崎が受洗した市ヶ谷教会が有力視される。また井川の「向陵記」に出てくる「森川町の教会」や「東郷坂教会」、それに藤岡蔵六が出席した海老名弾正が牧会する本郷教会（本郷弓町教会）も視野に入ってくる。

芥川龍之介は一高時代に、井川恭から英文の聖書　THE NEW TESTAMENT　を贈られている。この聖書は、現在東京駒場の日本近代文学館に保存されている。扉見返しに芥川の字で、「一高在学中井川君より贈らる」と記されている。手にとって中を開いて見ると、赤インクによるアンダーラインがかなり見出せる。熱心に読んだ確かな証拠である。井川は島根県立第一中学校時代の一九〇四（明治三七）年一月二十二日に、姉シゲ（繁）の夫、義兄佐藤運平の死に際して、人生の無常を悟ることになる。彼は翌日　THE NEW TESTAMENT　を松江の書店で購入する。「ニューテスタメントを買ふ」と彼は「日記」に記している。そして六日後の一月二十九日の金曜日から、オリバー・ナイトの主催する聖書研究会に出席することになる。井川は「兄上の遺書遺品を見今更に人生の果敢なしといふ念起る」（『一九〇三・二・二三』）などと「日記」に書きつけ、義兄の死が、日常性を越えた世界への思いに彼を駆ったことを語っている。彼は一家が通い、受洗した日本聖公会松江基督教会にもしばしば通っている。井川恭の生涯にわたる哲学や人生への関心は、義兄の死に淵源を見出すことができるのである。

一高に入って親友となった芥川龍之介に、井川はこの時求めた聖書と同じものを購入して贈ることになる。THE NEW TESTAMENT は、オックスフォード大学出版部刊行、本文は欽定訳聖書の改訳である。当時の中学生にも十分理解できるものであった。芥川の聖書受容の第一歩が、　THE NEW TESTAMENT　であったことは、記憶されてよいことなのである。井川の聖書や教会とのかかわりは一高時代もつづく。

一高で芥川に次いで井川が親交を結んだのは、長崎太郎であった。長崎太郎はこれまで述べてきたように、熱心なクリスチャンであった。中寮三番や北寮四番で生活を共にした二人は、互いに惹かれるものがあったらしい。年齢は井川が四つ年上であった。そういうこ

ともあって、二人の交流においては常に井川がリードした。「長崎日記」には、二人の交わりのさまが詳細に描かれている。長崎は井川からさまざまなことを学ぶ。彼は一九一二（明治四五）年六月二十九日から書きはじめた「日記」に「今日よりものせんとする此の日記を帰省前に当り最も大なる力を吾に与へられし新なる友井川兄に捧ぐ」と巻頭にに書きつけている。親近感を覚えだした二人は、芥川や石田幹之助とともに文展を観に行ったり、二人で散歩をしながらキリスト教論議をしたりする。同年十月二十日の「長崎日記」には、本郷教会で海老名弾正の説教を聴き、その感想を話し合ったことなどが書かれている。

三年になると、二人は一高の寮を出て、本郷区弥生町に下宿するようになる。同年十一月二十三日の「長崎日記」に、「十九日に弥生町の此処に転る事になつた。井川君と二人が二階の六畳の間を占領する。学校の時計台は真正面に寮は右手の方に屹立して居るのが見える。静な場所だ」とある。同じ下宿で生活するようになって、二人はさらに繁くキリスト教について話し合うようになる。いっしょに聖書を読み、祈り、また市ヶ谷教会牧師秋月致を訪ね、信仰談義をしたことなどが、「長崎日記」には描かれている。翌年春、二人は一時別れて暮らすが、最後の学期は共に小石川区上富坂町に新築落成した日独学館で送ることになる。一九一三（大正二）年四月十八日の「長崎日記」には、「井川君が朝突然来られて自分ら二人は詩篇の第一章を読み共に祈りを捧げた。自分は今日一日中愉快であつた」の記録が見られる。この時期井川は長崎と祈りの時を持っていたのである。夏休みに松江に帰省すると、井川一家とかかわりの深い聖公会の松江基督教会を訪ねては、オリバー・ナイトの後を継いだ永野武二郎牧師と、聖書の話を交わしてもいる。井川恭がキリスト教にもっとも接近するのは、一高の二年生から三年生にかけての時期であった。

芥川龍之介もこの頃、井川同様、聖書に関心を示していた。彼も先に述べたように、特定はできないものの教会にも出席し、聖書を熱心に読んでいるのである。彼が生きる問題とかかわって聖書を真剣に読むのは、大学時代に吉田弥生へのプロポーズを、養父母と伯母フキに反対されて生じた失恋事件の折りであるが、一高時代にも彼は他の仲間同様聖書を読み、キリスト教に並々ならぬ関心を示していたのである。井川恭や長崎太郎の寄宿していた日独学館のシュレーデルの教会にも出席したようだ。

他の仲間の聖書体験や教会とのかかわりに目を転じよう。一高時代の仲間で一番聖書に通じていたと思われるのは、佐野文夫である。佐野文夫は一八九二（明治二五）年四月十八日の生まれ。県立山口中学校を経て、一高には芥川同様無試験検定で合格した。長身白皙の美男子であり、多くの級友から羨望視された存在であった。父は図書館学者として知られた佐野友三郎であり、当時県立山口図書館長の要職にあった。友三郎は典型的な明治のプロテスタントの信仰の持ち主であり、子どもたちも小さな時から日曜学校に通わせていた。文夫も幼い時から教会の門をくぐり、聖書に親しんでいたことになる。が、彼は信仰に反する行動をとることが多かった。特に盗癖という悪習があったのである。

佐野は一高の二年生の時に、文科生のあこがれの的である文芸部の委員に選任されている。そして『第一高等学校校友会雑誌』に次々と鋭利な評論を発表するようになる。中でも第二二七号（一九

一三・六・一五）に寄せた「神の発見の過程」は、『旧約聖書』の「詩篇」第42篇の1節「あゝ神よ、しかの谷水をしたひ喘ぐがごとく／わが霊魂もなんぢをしたひあへぐなり」を巻頭に置き、懐疑に満ちた論者が「信」の一字に思いを馳せたもので、聖書を引用しながらの若々しい論調が注目された。けれども、佐野はその凛々しい容貌と明晰な頭脳にもかかわらず、性格的に弱いところがあり、卒業寸前に菊池寛の退学事件となる要因を作り出す。彼は、いわゆるマント事件の張本人なのである。菊池はこの事件で一高を追われ、京都大学の選科にまず入り、翌年高等学校卒業検定試験を受けて、本科に転じた。菊池の一高退学事件のことは、事件を知って菊池を救おうと奔走した成瀬正一のこととかかわるので、小著『評伝成瀬正一』（日本エディタースクール出版部、一九九四・八・一八）に、くわしく述べたので参照してほしい。佐野はすべてを知った大学側のはからいで、謹慎処分となり、秋吉台で不良少年の更正に尽力していたキリスト教の信徒伝道者本間俊平のもとで、大理石の採掘をしながら悔悟の一夏を送る。父は文夫に何とか信仰を取り戻してもらおうと、本間のもとに息子を送ったのであった。

佐野文夫は芥川ら仲間に二か月遅れて、九月一高を卒業し、大学は東大の独文科に入った。翌一九一四（大正三）年二月にはじまる第三次『新思潮』に同人として参加した彼は、創刊号に「生を与ふる神」を載せている。これまた聖書を引用し、死や神に思いを巡らしたものながら、一高時代の論文のような勢いがない。表面的で訴えるものが乏しいのである。芥川は創刊号の感想を山本喜誉司宛の手紙で、「久米の戯曲と豊島の小説はいゝでせう佐野の論文も今度のは空疎なものです」と評している。佐野はこの一編を残して消えて行く。その後の佐野文夫に関しては小著『芥川龍之介の復活』（洋々社、一九九八・一一・二八）の「佐野文夫」の章を見てほしい。

藤岡蔵六・成瀬正一・松岡譲の三人も、キリスト教とのかかわりが深い。藤岡蔵六は宇和島中学校時代にメソジスト教会（現、日本基督教団宇和島仲町教会）に出席、ターナー牧師の説教を聴き、一週一度のバイブル・クラスにも出席している。また、一高時代には前述のように、海老名弾正が牧師をしていた本郷教会（本郷弓町教会）にも出席した。しかし、彼は長崎太郎とは異なり、懐疑的で信仰にはなかなか入れないのであった。彼は芥川や井川と同様、批判的で反省的な性質を多分にもっていた。長崎太郎を評して、「彼は信仰に安住し、宗教的法悦を享受している。私は絶えず苦しみ悩んでいる。其差は実に万里である。私もどうかして法悦の境地に達したいと切願してはいるが、何時も理性の眼が輝いて宗教的安眠をさせてくれない」（『父と子』）と言う。

成瀬正一は一高入学後、母の勧めで近角常観の求道学者に通うが、常に満たされない思いを抱き、聖書を読み、時に教会に通うことになる。教会は特定できないが、藤岡蔵六の通った本郷弓町教会が有力視される。松岡譲は生家が浄土真宗東本願寺派の末寺であったにもかかわらず、聖書に接近し、キェルケゴールを愛読していた。彼の代表作となった『法城を護る人々』にも聖書の影響を読むことも可能だ。主人公の宗教改革にかける意気込みの根底にあるものは、パウロの「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考える」（「ローマの信徒への手紙」3・28、新共同訳による）という立場に近いのである。

このように芥川の仲間は、皆聖書やキリスト教とかかわりがあっ

た。いや彼らばかりでなく、やや年長に当たる有島武郎や志賀直哉・武者小路実篤・長与善郎ら、のちの白樺派の人々にも同様なことが言える。有島や志賀のキリスト教への一時期の傾倒は、激しいものがあり、武者小路や長与や芥川と同世代の郡虎彦などは、聖書を素材としたイエスのドラマを好んで戯曲に仕立てている。新時代の青年にとって、精神の自由や愛の教えを高らかにうたうキリスト教は、魅力に富んだ存在であったのだ。芥川龍之介とてしかりであった。が、第一高等学校時代の芥川龍之介には、聖書はどちらかというと、外来の新知識としての関心であり、哲学や文学を理解する手段としての接近であった。いうならば教養主義的知的関心からの聖書や教会への接近であった。芥川が聖書をはじめて自身の生きる問題と関連させて読むのは、大学時代の失恋事件の折りであった。一高時代の聖書の受容は、彼の本格的な聖書とのかかわりのプレ・ヒストリー時代と言えるのである。

学内行事

一高には毎年いくつかの行事があった。秋の発火演習、三月一日の紀念祭、各部主催の講演会などである。そのいくつかに目を留めてみよう。

入学一か月後の一九一〇（明治四三）年十月十一日から十三日にかけて、一高全校生徒の「発火演習」（行軍）が行われた。二三年生にもなると、何か理由をつけて休むこともできるのだが、新入生はほぼ全員が出席する。芥川龍之介もこの行事には参加している。「発火演習」とは、銃に実弾をこめず、発射する演習をいう。一種の軍事教練である。しかし、そう厳しいものではなく、野外活動であり、入学早々の行事は、生徒間の親睦を深める行事としても位置づけられていた。この年の目的地は山梨県の甲府・酒折方面で、甲府連隊副官が統率の任に当たった。第一日は早朝新宿から中央線の汽車に乗り、石和駅で下車、雨の降りしきる笛吹川の沿岸で演習を行った。最終日の十三日は甲府の宿を午前二時半に出て、笛吹川のほとりで演習実施ときつい面もあった。芥川の山本喜誉司宛書簡（一九一〇・一〇・一四付）には、「演習は思ひしよりも苦しきものにて在甲府の聯隊副官が統率の任に当りし為か思ひしよりも遙に真面目なるものに候」とある。が、二日目は甲府市内で自由行動がゆるされている。甲府の宿では二夜連続のコンパが持たれ、寮歌や佐渡節やデカンショ節を覚えたという。新入生の親睦旅行の色彩があったことも、こうした内容からして知れる。井川恭の一高時代の「日記」、――「向陵記」にこの演習の日々の記録があり、『旧友芥川龍之介』（朝日新聞社、一九四九・八・一〇）に引用されている。

芥川らにとって、一高入学後はじめての「発火演習」は、厳しいものがあったとはいえ、級友との仲が深まったという点では、意味があったようだ。また、山梨という地を好ましく思う心まで育てている。先の山本喜誉司宛書簡には、「追伸」として、「甲州葡萄の食ひあきを致し候あの濃き紫に白き粉をふける色と甘き汁の滴りとは僕をして大に甲斐を愛せしめ候」とある。なお、芥川は二年生の「発火演習」の時は、「気管支加太児」を理由に欠席している。

次に紀年祭に進もう。一高紀念祭は、一八九一（明治二四）年三月一日に第一回の行事が持たれている。芥川らが迎える最初の紀年祭は、一九一一（明治四四）年三月一日で、第二十一回に相当する。『校友会雑誌』第二〇四号（一九一一・三・三一）の「寮報」に、

「紀年祭見世物見物」という記事が見える。それぞれの部屋が知恵を凝らして何らかの出し物を考えるのである。他愛のないものが多い。中で北寮六番は、「一高雛壇」と題し、恩師の畔柳都太郎と速水滉と村田祐治の姿を茶碗と鶏卵で作っていて、やや目を引いた。紀年祭は寮創立記念式典とその後の茶話会・余興、それに右のような各種展示会、仮装行列・太神楽・角力などとヴァライティーに富む。芥川と一高同期の森田浩一の日記（「浩一日記」）によると、南寮十番の井川恭は、紀念祭の寮歌応募に応えて寮歌を作ったが、駄目だったとある。芥川は一年生の時は入寮していないから、見学するのが関の山であったろう。

二年生になって寮に入っても、芥川は一高名物の紀年祭に積極的にはなれなかった。養家で大事にされて、孤独と夢想の少年時代を送った彼には、そうした集団主義は苦手であった。寮は彼には親しみにくい場所であったのだ。

ところで、各部主催の講演会中、芥川に強い印象をとどめたと思われるのは、入学半年後の一九一一（明治四四）年二月一日に行われた弁論部主催の特別講演会での徳冨蘆花の講演であった。この講演、――いわゆる「謀叛論」演説と芥川とのかかわりのことは、わたしはしばしば言及してきた。前著『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房、一九九九・三・二〇）においても、かなりのページをとって論じた。その趣旨は、当時の一高生に与えた蘆花演説の波紋が、芥川にも及んでいたというところにあった。芥川側に蘆花演説を聴いたという資料がないため、わたしは当初、松岡譲や久米正雄や菊池寛らの文献に注目した。が、それでも不十分と感じ、周辺人物の日記の探索・発掘に力を力を注いだ。そして「成瀬日記」や「井川日記」という、「謀叛論」演説に言及した一等資料に巡り合ったのである。わたしの芥川周辺の人々の資料探索は、肝心の芥川に講演会に出席したという記録がない限り、芥川と蘆花演説を結びつけることはできない、芥川作品に蘆花の「謀叛論」の影響を読むという仮説は成立しないとかいうかたくなな実証主義者との闘いでもあった。

わたしはかつて「実証の現在」（『文学・語学』第一三五号、一九九二・九）という一文を書き、わたしの立場を説明したことがある。要するに文学研究における実証とは、事実の割符合わせでも資料の単なる羅列でもないということである。テクストや資料を通し、想像力をはたらかせて仮説を打ち出すのである。仮説は研究の新たな地平を拓き、他方で書き手の想像力はテクストや資料によって修正され、仮説は次第に対象化されていくのである。

蘆花の演説は、大逆事件を扱った政府のやり方のまずさにはじまり、最終の段では、「謀叛を恐れてはならぬ。謀叛人を恐れてはならぬ。自ら謀叛人となるを恐れてはならぬ。新しいものは常に謀叛である」との結論に至るもので、政治批判とともに、古い制度や考えからの解放の必要が叫ばれていて、多くの学生の心をとらえたのである。が、学内の保守派からは、不敬演説として非難されることになる。『向陵誌』（第一高等学校寄宿寮、一九一三・六・一六）の「自治寮略史」は、「明治四十四年二月一日、弁論部徳冨健次郎を請い来りて演説会を開けり。氏は　謀叛論　なる題の下に過般死刑に処せられし幸徳秋水等を論じ政社の処置を攻撃し遂に畏れ多くも皇室に対して不敬に言あり」と記している。学内世論は二分され、さまざまな論議が交わされた。文部省はさっそく調査に乗り出し、校

長新渡戸稲造と弁論部長畔柳都太郎が、譴責処分を受けることになる。

わたしはこうした事態の中で、芥川龍之介一人が事件の圏外にあったとは考えられず、彼もまた蘆花の演説を主体的に受けとめ、謀叛の精神は、「羅生門」をはじめとする諸作品に顕在化していったとの考えをもつのである。芥川が直接演説を聴いたか、友人から聴いたかは別として、一高時代に「謀叛論」にふれたであろうことは、もはや疑うことができないところまで文献探索は進展している。もっとも新しい「謀叛論」の波紋の文献をここに示そう。なぜなら学問は日進月歩であるからだ。同期生森田浩一の日記（「浩一日記」）の一九一一（明治四四）年二月三日の記事からの引用である。

八時半校庭に集合すぐ倫理講堂に飛び込む。後から来るので前の方は、一寸のすきも無くなつた。大沼さんが大声でもう少し後へ下がれとドナツタが皆きかず、前からは入れぬ様にして漸やく静まつた。さんざ待つてから校長を初め諸教員が着席、校長は一時間に渡る、社会主義反対演説をやつた。我一高生徒にして少しでもコンナ説をいだかない様にと云つて下りた。十時から授業がある。だれだか、思想が混乱している中は授業などはやつても駄目ですから休みにして下さいと云つた相だ。

蘆花演説が一高生全員に及ぼした影響を、端なくも伝える文献である。「思想が混乱している中は授業などはやつても駄目ですから休みにして下さい」という要望が出るほど生徒は動揺していたようだ。こうした全学的動向を伝える「浩一日記」の出現は、一高在学中の芥川龍之介が、ひとりぽつんと蘆花事件の圏外にあったと考える方が無理との推論を呼ぶのである。肝心の芥川側に資料がない限り、芥川と蘆花「謀叛論」とのかかわりは考えることができないという無精な研究からは、新たな芥川像は生まれようがないのである。

読書と旅

一高時代の芥川龍之介の読書は、際限なく広がる。もともと本好きの彼のことである。しかも入学当初は入寮しなかったこともあって、彼はもっぱら図書館に「鑵詰まる」ことが多かった。場所は一高図書館と帝国図書館である。また日本橋の丸善に行き、本を注文した。一番利用したのは、一高の図書館である。もっとも本を読むという行為は、ひとり芥川の独占ではなかった。一高生のほぼ全員がよく本を読んだのである。親友となる井川恭も一高入学後、寮生活にも慣れると、猛然と図書館の本を読み出す。一高の図書館は、彼らの欲求に応えるものがあった。恒藤恭の名で書かれた「読書のおもい出」（『現代随想全集27』創元社、一九五五・三・三〇）には、次のようにある。

一高に入学して自治寮の生活をするようになつた当座は、まつたく新しい環境の中にはいつたような気がして、それに適応することに専ら心を労したありさまだつたが、やがて冬がおとずれ、寮の生活にも慣れて来たころから、勃然と読書欲がうごき出した。松江図書館から見ると、とても比較にならぬほど豊富な蔵書をもつている一高の図書館は、私の読書欲を充分にみたして呉れた。

はじめてドイツ語を教わつたものの、中々ひとりでドイツ語の書物をよむだけの力が出来上らず、主として英語の書物に読みふけつた。シェレー、キーツ、ワーズワース、スインバーン、ロセッティ、ブラウニングなどの詩集を、よくわからぬなりに繰り返し読んだり、スコット、ディッケンズ、エリオット、ポー、ホーソーン等々の小説を、これも亦よくわからぬなりに次々に読んだ。しかし一ばん時間をついやしてよんだのは、トルストイのものの英訳で、ずいぶん永くかかつて、主な作品を皆よんだ。

また、井川に次ぐ仲間の藤岡蔵六は、『父と子』の中で、一高図書館にふれて次のように書いている。

一高の図書館に英訳のトルストイ全集があった。之は有り難いと思って私は度々借りて読んだ。『コサック』や『生い立ちの記』（幼年・少年・青年）等面白かったが、殊に『復活』は私に大きな影響を与えた。人間は一度罪を犯しても其儘死んでしまってはいけない、それを後悔して新しく生れ更らなければならぬ、其処に人生の喜びがあり希望が湧く。冬の間霜枯れていた野の草が、春来れば新芽を吹いて生長する様に、人は復活しなければならぬ。私の悩みとそれを克服せんとする努力は、此書により新なる力と勇気とを得た。

『トルストイ』と平行して私は大西祝著『西洋哲学史』を読んだ。此書は内容が複雑難解であるため、小説を読む様には行かなかった。私は考え考え読んだので、上下二巻の大冊を読了するのに数カ月かかつた。読み了った時私は、どうやら哲学と言うものに対する大体の見当だけは付いた様な気がした。今迄外部からのみ眺めていた哲学と言う大殿堂の其門内に一歩だけ踏み込むことが出来た様な気がした。哲学を研究するのに哲学史から始めるのは確かに良い方法だと思った。

芥川龍之介は一高入学の年から翌年春にかけて吉井勇に傾倒する。歌集『酒ほがい』を府立三中時代の親友山本喜誉司に貸し与え、「中でいゝと思つた歌に色鉛筆でしるしをつけて置いて下さい、是非願ひます」と書くのは、入学した年のことであり、翌年春には、「此頃僕は吉井勇が大好きになつた角筈のうちへ行きたくつて仕方がないえらいとはちつとも思はないがなつかしい人だと思ふ」（山本喜誉司宛、一九一一・二・一四付）とか、「吉井勇氏の脚本　嚢（ふくろ）の女　誠に面白くよみ候　夢介と僧と　以上乎と思ひ候」（同、一九一一・三・一四付）とか書き送っては、友人に賛同を求めているのである。日本古典への関心も高まり、「この頃は枕の草紙が大好きになつて耽読してゐます俊成の女と清少納言とは、日本の女流作家の中で大好きな人になりました」（山本喜誉司宛、一九一一・五・二〇付）との見解を述べている。

府立三中を卒業した頃から芥川はヨーロッパ文学への関心を深め、モーパッサン、アナトール・フランス、イプセンなどを読みはじめ、一高入学後はモーパッサンのほか、メレジコフスキーやメーテルリンク、それに井川や藤岡同様トルストイやツルゲーネフ、プーシキンなどロシア文学にも親しむようになっていく。ロシア近代小説との出会いは、昇曙夢（のぼりしょむ）の『露西亜現代代表的作家六人集』（易風社、一九一〇・

五・二〇）による。「六人集の中でアンドレエフの　霧　はうまく書かれてると思ふ読者をして読者自身の生活を顧みさせる力があるやうな気がする。／アルツイバーセフの　妻　もいゝ」（山本喜誉司宛、一九一〇・六・二二）との感想を抱いている。

倉智恒夫の「芥川龍之介読書年譜―フランス文学関係図書―」（『比較文学研究』一九八三・四）、同「芥川龍之介読書年譜―英・露・独・北欧文学関係図書―」（『現代文学』一九八三・六）によると、シェンキェーヴィチの『クオ・ヴァディス』を読了したのは、一九一〇（明治四三）年十二月三十日、オスカー・ワイルドの De profundis を読了したのは、翌年の夏休みの八月八日のことである。一九一二（明治四五・大正元）年になると、ベルギーの詩人ヴェルハーレン、それに三中時代恩師広瀬雄に勧められながら読めなかったキップリングの The jungle book も読了し、ワイルドの諸作に熱中する。三年生になるとゾラやバーナードショウにも目が及び、ルイス・キャロルやキングズリーの童話「水の子」なども読んでいる。

一方、旅は相変わらず盛んに行っている。一年生の春、一九一一（明治四四）年四月には、府立三中以来の友人で一高第二部一年三之組の西川英次郎と赤城に登っている。早春の赤城山は素晴らしく、この時の体験がよほどよかったとみえ、のち仲良しグループの井川恭・藤岡蔵六・長崎太郎との卒業旅行では、赤城を推薦し、再び訪れることとなる。赤城は芥川の生涯愛した山である。同じ年の夏休みの七月十五日から十八日にかけては、府立三中時代の仲間六人（西川英次郎・中原安太郎・中塚癸巳男（きみお）・木本守治・長島武・神山与男）と東京青梅の御嶽山に登っている。十五日の夜、新宿を徒歩で出発、青梅街道を青梅へ、さらに御嶽山頂へ。帰りも同じコースをたどった。「合せて彼是三十里（注、約一二〇キロメートル）ばかり歩きました」（山本喜誉司宛、一九一一・七・一八付）というから、一日四十キロである。健康であったからこそできた旅である。

当時、ロシア文学――ツルゲーネフやプーシキンに親しんでいた芥川は、右の山本宛書簡で、福生あたりを通りながら、ロシアの村を想起し、互いにロシア名をつけあったと言い、さらに「青梅の淋しい町多摩川の白く濁つた水さうして御嶽の杉林の夕暮――桑畑の中を走る汽車の窓にはルージンがなつかしい思出にふけつてゐるでせう欅林の路をゆく女はエレンかもしれませんそしてあの刈麦の畑のはてにある藁葺の中には、サモワルの音を立てる傍でステツプのリヤが酔倒れてゐるやうに思はれます、けれどもプーシキンは――レルモントフは――ツルゲネフは――ドストエフスキーは――トルストイは――ゴリキーはどこにゐるのでせう」と右の書簡に書きつけている。

健康にも恵まれていたこともあって、一高時代の芥川はしばしば旅に出かけている。旅は日常の生活からの解放を意味し、精神の充実に益するところが大きい。芥川は旅を好んだ。一高時代の他の長旅を拾うと、二年生の春休みの富士五湖方面への旅、同年八月の信州・木曾・名古屋方面への旅、それにすでにちょっとふれた仲良しグループの卒業記念旅行とした赤城・榛名方面への旅の三旅行となる。

まず富士五湖方面への旅は、西川英次郎といっしょだった。一九一二（明治四五）年四月一日、朝八時に新宿駅を出発する。中央線の大月までは列車で、大月からは徒歩で谷村町（現、都留市）を経て、下吉田（現、富士吉田市）まで二十八キロの道を歩き、その夜

は小菊という宿に泊まった。「空晴れて不二の雪さはやかに白く其処此処の山畑には桑の枯枝の下に菜の花の黄なるを見うけ候」との四月一日付の山本喜誉司宛はがきが残っている。同じはがきには、「旅人よいづくにゆくやはてしなく道はつゞけり大空の下」の歌が書き込まれている。その後二人は、富士五湖をいくつか見て回り、富士の裾野を半周し、静岡大宮（現、富士宮市）に出た。帰途のコースは不明だが、東海道線で帰京したものと思われる。徒歩が多いので、健康でなければできない旅であったといえよう。健脚芥川龍之介というイメージを添える旅である。

同じ年の夏休みの木曾・名古屋方面への旅は、八月十六日新宿駅を出発、中央線を利用しての出発であった。同日付の小野八重三郎宛の便りには、「旅といふこの一語にもうるほひぬるまんちつくの少年の眼は」の歌が書き込まれている。芥川が旅をいかに愛したかを語る歌でもある。木曽路や諏訪湖は、少年時代からあこがれていたところであった。彼は木曾の御嶽、それに駒ヶ岳にも登って、名古屋に出る。一人旅ではなかったようだが、同行者は特定できない。

卒業記念旅行としての群馬県の赤城・榛名方面への旅は、幸い井川恭が郷里の新聞『松陽新報』に、「赤城の山つゝじ」一～五（一九一三・七・一六、一七、一九、二二、二三、『旧友芥川龍之介』収録）として文章に残しているので、そのおおよそは知ることができる。芥川龍之介一高最後の旅である。時は一九一三（大正二）年六月下旬のことである。この頃には、すでに各自の進路は決まっていた。芥川は東京帝国大学文科大学文学科の英吉利文学専修に、藤岡蔵六は同じところの哲学専修に、そして井川恭と長崎太郎は、京都帝国大学法科大学政治学科である。卒業試験の終わった翌六月二十一の午前、井川恭・藤岡蔵六・長崎太郎の三人は、新宿の芥川の家に集まって、旅の打ち合わせをしている。芥川を含めた四人の卒業旅行は、六月二十二日の早朝、上野駅出発にはじまる。前述の菊池寛の退学事件は、進行中であり、列車の中では話題になったことだろう。彼らは足尾鉄道の小さな駅、上神梅（かみかんばい）で汽車を降り、渡瀬川の渓谷を後ろにして赤城山の山裾に分け入り、夕方中腹の大沼（おの）に着く。赤城山は複式火山である。海抜一八二八メートルで、頂の噴火口の跡が大沼と呼ばれる湖となっているのである。水は澄んで美しい。湖の周辺は白樺林となっている。

新坂峠から湖畔までが特にすばらしい山道であった。赤城はつつじの名所でもある。彼らは、乱れ咲く山つつじを楽しみ、井川恭の表現を借りるならば、「天上の愉楽の園にもまして楽しい逍遥」（「赤城の山つゝじ」）をしながら湖畔の宿にたどり着く。さらに井川は「あるいてゆくうちにも、　ほんたうに佳いだらう！美しいだらう！だから僕は赤城が一等好きだつて言ふんだ。ねえ、何処よりも佳いだらう　と去年の春休みの頃まだ湖畔は雪に埋もれて居る折りに来たことのある芥川は言ひつづけた」（同上）と書いている。赤城というと、志賀直哉の「焚火」や高村光太郎の「赤城の歌」、あるいは尾崎一雄の「赤城行」が知られているが、芥川もまた深く愛した山であった。

その夜は湖畔の静かな宿に一泊、翌二十三日は、早朝黒檜（くろび）山に登り、下山後は徒歩で前橋に出、電車で伊香保の温泉へ行って泊まった。二十四日は榛名山に登り、二十五日に芥川は藤岡とともに帰京している。井川と長崎はさらに妙義山から軽井沢にまわった。二十三日付で山本喜誉司宛に出した絵はがきに、芥川は「水楢落葉松（みずならからまつ）白

樺の若葉山つゝじのにほい鶯の声その間に燻し銀のやうな湖が鈍く光つてゐます」と書きつけている。

芥川にとってこの卒業記念旅行は、特別に印象に残ったらしく、創作にも取り入れようとしていた。後年恒藤姓となった井川によると、「それから三四年後のこと、赤城の頂の山霧の中に径がかようて居る叙景を結末に取り入れた、　道　と題する長篇の小説を書きたいと思ふと、芥川が私に語つた事があつたが、その希望を現実にしなかつた」（「友人芥川の追憶」『文藝春秋』一九二七・九）と言う。群馬県の赤城山は、芥川龍之介の青春の思い出とともにある山なのである。

観劇その他

芥川龍之介の一高生活は、それなりに充実していた。試験の時はがむしゃらに勉強をしなければならなかったが、普段は旅をしたり、音楽会や美術展へ行ったり、オペラや演劇鑑賞にも出かけた。宮坂覚編『芥川龍之介の周辺』（翰林書房、二〇〇一・三・二〇）収録の庄司達也「芥川芸術鑑賞年表」には、一高在学中の芥川の芸術鑑賞の事跡がかなりくわしく記録されている。

音楽会は上野の音楽学校で毎月開かれる定期演奏会をはじめ、帝国ホテルでの東京フィルハーモニーの演奏会も欠かさなかった。一九一二（大正元）年十二月一日に行われた東京音楽学校第27回定期演奏会は、アウグスト・ユンケルの送別記念音楽会であったが、芥川には特に印象的であったらしく、同月六日消印の山本喜誉司宛絵はがきに添えて、「ユンケルの演奏会は面白う御座んした土耳古の毛氈のやうに美しいガーデやわすれな草の花のやうに優艶なグリーヒや青と銀とのタペストリのやうにしみじみとしたシポーアがユンケル氏のあの指揮杖のさきから宝石のやうに流れ出したときの事を考へると今でもうれしいやうな気がします」と書きつけている。

美術展は巽画会や白樺主催版画展や文展に出かけている。他の仲間同様芥川は絵は好きで、中学時代には水彩画を好んで描いていたほどだ。井川恭や石田幹之助など絵画好きの友人の影響も大きい。歌舞伎は小さい頃から家族と観ていて、その鑑賞眼は高かった。一高時代も相変わらず観ており、後年には劇評を担当するほどであった。明治座の劇もよく観ている。一九一一（明治四四）年三月十二日には、市川左団次一座の「鈴（ベルス）」（エルマン・シャトリアン）、水滸伝に取材した「景陽岡」、岡本綺堂の「村上義光」近松門左衛門の「長町女腹切」を観、「ベルスを見候景陽岡と義光を除きては皆面白く候殊に女腹切がうれしく覚え候」（山本喜誉司宛、一九一一・三・一四）との感想を懐いている。芥川の一高時代は、日本で観劇熱の高まった時期であり、彼は機会をとらえては観劇にいそしんだのである。

一九一二（明治四五・大正元）年になると、六月二十六日にバンドマン一座のオペラを観たり、十一月十一日にはアラン・ウィルキー一座の「サロメ」を横浜のゲイティ座に観に行ったりしている。この日は井川恭・久米正雄・石田幹之助らといっしょであり、当日の様子は恒藤恭の回想「青年芥川の面影」（『近代文学鑑賞講座11芥川龍之介』一九五八・六・五）にくわしい。芥川は後年「　サロメ　その他」（『女性』一九二五・八）にこの劇について書くことになる。帝国劇場で　外訳の『ファウスト』の上演を観るのは、一九一三（大正二）年三月下旬のことである。演劇は芥川の好んだ芸術ジャ

ンルであった。

一高時代の芥川の学業外のノートに『椒図志異』と題されたものがある。葛巻義敏の解説つきの復刻版（ひまわり社、一九五五・六・一五）があって、全集にも収録されている。いま手許にある復刻版で見ると、表紙は朱筆で題名が記され、「芥川竜之介」と「龍」は略体の「竜」が用いられている。目次の箇所には「芥川文庫蔵椒図志異」とある。中身は先輩・知人・家族、それに雑誌や書物から収集した妖怪談を分類、清書したものである。大学ノートほぼ一冊分に精力的に集めた話が、青インクでびっしり書き込まれている。その生涯を通しての怪異趣味、神秘への関心の始源がここにあると言えよう。

「椒図志異」は芥川龍之介の一高時代の思い出の製作物となった。彼は久米正雄や佐野文夫のように、学内ジャーナリズムの拠点『校友会雑誌』編集の文芸部委員となることもなかった。が、後年「追憶」や「本所両国」に一部が生かされる「椒図志異」は、芥川の文学的出発を考える上で、きわめて貴重なノートと言えるのである。

一高時代の芥川の他作品は、葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』（岩波書店、一九六八・二・一三）に、そのいくつかを見出すことができる。「菩提樹―三年間の回顧―」「ロレンゾオの恋物語」「寒夜」「梅花」「菊」などである。これらは前述のように、学校作文なのである。なお、一九一三（大正二）年四月二十日の日付のある未定稿小説「お吉と興道」は、現全集二十一巻に収録されている。

一高時代の芥川は、養家を離れ、自治寮で生活するようになって、人間的にも大きく成長する。ストームや賄征伐には眉をひそめたものの、寮生活になれると、「寮雨」（トイレに行かず、適当なところで小用を果たすこと）などもできるようになる。神経質な一面は、十二名との共同生活のなかで、自然に癒されていく。井川恭や藤岡蔵六という内省的で哲学的な友人との出会いは、彼の生活態度にも影響を与えるようになる。一高時代は、芥川龍之介という個性が自覚され、進化した時代であったと言えるのである。